

妖怪賢者に気に入られ

桜華太夫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「人は生まれながらに平等じゃない」

そんな現実を知った少年が妖怪の賢者に気に入られたら？

その力を平和のために使ったら？

その先に待っているものは？

盛大(?)に始まるシリアスかと思いきやそこそこなギャグストーリーの、はじまりはじまり。

目次

プロローグ	1
憧れの存在といきなり出会ったらどう反応する？ (#2)	4
緑谷出久：アナザーオリジン (#3)	9
緑谷出久：アナザーオリジン (#4)	18
入試試験って大体ノーベンで行かない？作者だけ？ (#5)	22
作者の高校初日はお通夜でした。 (#6)	30
個性把握テストで大暴れ (嘘) (#7)	34
戦闘訓練説明編 (#8)	40
訓練と実戦の境界 (#9)	45

プロローグ

「——大丈夫、アナタはヒーローになれますわ——」

目玉が張り付いたかのような空間の裂け目から出てきた女性の一言は、僕に力きぼうを与えてくれた。

「諦めた方がいいね」

4歳になってそろそろ個性が発現するかというとき、お母さんと一緒に病院へ訪れた僕は、無慈悲にもそう告げられた。

「そつ、そんなつ」

「足の小指に二つ関節がある。今時珍しい何の個性も持っていない型だね」

——絶望した。家に帰って、何回も見返した動画を見ても、気持ちはずれなかった。

「ごめんね出久ツ！ごめんねつ、ごめんねえつ、」お母さんに謝られた。

僕は、ヒーローになれないのかな……。

「アナタは、何故ヒーローになりたいと思ったの？」

「……オールマイトに、あこがれたから。」

「何故、オールマイトに憧れたの？」

「こまってる人をわらってたすけちやう、ちようカツコいいヒーローだから。」

「なら、ヒーローになりたいのなら、アナタが泣いていたら助けられないのではありませんか？」

「……ぼくは、むこせいっ、だからっ」

「では、ヒーローになるのを諦めるの？」

「っ、あ、あきらめっ、たくっ、ないよおっ、」

——合格ね。

「そう思うのであれば、アナタに力を与えましょう」

「、っ、え？」

「今はぐっすり、おやすみなさい。」

「おね——さ——、」

「大丈夫、アナタはヒーローになれますわ」

「——よかったですか？」

「いいのよ、あの子には、頑張っって欲しいから」

「・・・私には、紫様の御心は理解できません」

「・・・ワタクシはね藍。悪あがきをする人間が大好きなの。愛してるの。短い命の灯を必死に燃やして生きている。ワタクシたちのような存在には到底出来ないそれが。たまらなく輝いて見える。だから応援したくなるのよ」

「・・・そう、ですか。そう仰るのであれば、私からは何も言えませんが」

「フフツ、賢い従者も好きよ？」

「感謝の極みに御座います」

「・・・さて、緑谷出久君。アナタはどのような悪あがきを見せてくれるのかしら。ウフフフツ」

「ところで紫様」

「なにかしら？」

「何故、寝間着のままなのでしょうか？」

「・・・あつ。」

憧れの存在といきなり出会ったらどう反応する？（#2）

「――「アナタはヒーローになれますわ」――

懐かしい夢を見た。

僕がまだ4歳で、無個性だと分かった日に見た夢の中の女性に言われた言葉。

その言葉は妙に僕の心に染み込んでいき、かすかな幽かな希望になった。

「おーい」

そういえばあのとき「力を与えましょう」とか言ってたような…

「緑谷ー」

でも僕には変化なんて無いし…

「緑谷ツツツ!!」

「うわあはいいい!!?!」

「いつまで上の空になつとるつもりだ!」

「すすすすすみませんっ!!」

「まったく、今は進路について考える時間だぞ。…と言っても、やっぱりみんな」

「「「ヒーロー志望!!」」」

「だよなあ。いまだきヒーロー目指さな「センサー」、「い奴つと、なんだ爆豪」

「みんなみんなつて、オレラをこんな没個性共と一緒にしないでくださいよおー」

「んだよ爆豪!」

「チヨーし乗んな!」

「ふぎけんなテメエ!」

「ちよつと個性強いからつて!」

「そーだそーだ!」

「あ”あ”ん”?」

「[[「ヒエツ」]]」

「つたく、アホらし、なあ、出久？」

「そつ、そうだね、アハハハ。」

彼は僕の幼馴染み、爆豪勝己。天才肌な努力型天才。そして、僕の一番の親友だ。

「にしてもよ爆豪。緑谷って『無個性』だよな？なんでそんな特別扱いしてんだ？」

「テメエは個性でしか人のこと見れねえのか？バカが」

(((お前が言うなっ!!!)))

「出久は無個性なのにオレに付いて来てんだ。とんでもねえ努力だな。特別扱いしねえ方がおかしいだろおがよ」

「かつちゃん・・・」

そう。僕はあの日から血の滲むような努力をしてきた。無個性でも、どんなに困ってる人も笑って助けられるヒーローになるために。「しずかにしなさい、まつたく・・・おお、二人とも雄英志望か。まあ二人の学力なら問題ないだろうな。」

「つたりめーだろーがよお」

「頑張ろうね、かつちゃん！」

「おうよ！」

「はあ・・・先生人使い荒いなあもう」

担任の手伝いをしてたらすっかり遅くなっちゃった。もう6時近くになってる。

「帰ったら筋トレして、お風呂入って、ご飯食べて・・・」

「Mサイズの隠れ蓑オ」

「!?ヴィラン!?うわあああああああああああつ!!!」

(な、なんでこんなところに?!?!?)

「大丈夫ウ、体に乗っ取るだけさア落ち着いてエ、苦しいのは45秒だけ、すぐ楽になるさア」

「モガアツ、モゴツ、カフツウゴツ、モゴオ!!」

(息があ、できないっ、ち、力も入らないっ、死ぬ、?ここで?いやだあ、だれかつ、たすけてえ、!)

「もう大丈夫だ、少年。」

「私が来た」

「チイツ!!」

「TEXAS SMASH!!」

「グウツ、グワアアアアアア!!」

(このっ、圧っ!!)

(・・・オール、マイ——・・・)

やっぱり・・・すごいやあ・・・

しばしばしばしばしばしばしばしばしばしば

「——イ、へ——、へイ!へイ!へあ、よかったあ!」

「——へっ?」

「おわあああああああああ?!?!」

(オ、オールマイト?!?!なんでこんなところに?!?!)

「元気そうで何よりだ!いやあく悪かった!ヴィラン退治に巻き込んでしまった、いつもはこんなミスはしないのだが、慣れない土地で浮かれちやつたかなあ! H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A

(シット・・・)

ドガシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「はー、ヒー、はー、ヒー、こ、こわかったあ・・・」

「まったく、階下の方に話せば降ろしてもらえるから、私はマジで時間がないので、ホント、これでッ」

「あっ、あのっ！まっってっ、あの」

「NO！またない！」

「でもっ、、！」

——「諦めた方がいいね」——

——「ごめんね出久ツ！ごめんねっ、ごめんねえっ！」——

(・・・確かに、無個性じゃ無理かもしれない、でも、それでも僕は・・・)

——「大丈夫、アナタはヒーローになれますわ」——

(それでも、一人には言ってもらえた。だから、だから・・・)

「個性がなくてもっ、ヒーローはできますかっ!!」

「個性がない人間でもっ！アナタみたいなヒーローになれますかっ

!!!

(っ、っ、、、、)

——この、オールマイトと出会えた奇跡と、あのとき見た夢の幻想が、僕の運命を大きく変えるなんて、このときはまだ、想像さえしていなかったんだ——

緑谷出久：アナザーオリジン（#3）

「個性がない人間でもっ！アナタみたいなヒーローになれますかっ
!!!」

ついさつき出会った、というかヴィラン退治に巻き込んでしまった少年にそう聞かれた。

やはり彼もヒーロー私に憧れ、目指しているようだ。無個性なのに。
（昔の私とそっくりじゃないか・・・）

私も彼と同じように無個性で、それなのにヒーローに憧れた。そんなとき私は師匠に出会い、このワン・フォー・オールの力を受け継いだ。人に恵まれ今の私がいる。

しかし、恵まれすぎるのも良くないのではないか。そう思う私がい
た。

だから、私は、心を鬼にして言うのだ。

「諦めろ、とは言わない。けどね少年、それ相応に現実を見るのも大事
だよ」

「ツ・・・」

「プロはいつだって命懸け、個性ちからが無くても成り立つとは、とてもじゃないが口には出来ない」

「っで、でも、」

「人の命を助けたいと言うのなら警察になるという手もある。ヴィラ
ン受け取り係と言われてはいるがあれも立派な仕事だ」

「・・・」

「・・・ではな少年」

（心苦しいが、これは必要な事・・・割り切るんだッ！私ッ！）

「さて、早くこいつを届けなければ・・・ば・・・？」

「くっ、くっ、うっ、うっ、うっ、うっ、うっ、うっ」

「おい！だれか捕まってるぞ！」

「頑張れヒーロー！」

「人質の子めつちや抵抗してんじやん！」

「やれヤバくない？」

「やっちまえー！」

「うおおおおおおおおあああああああああつっつっつ！！！！こんな
ドブ男にいいいいいいいい！！！！オレがのまれるかあああああ
あああああああ！！！！」

「この個性と力ならばア、ヤツに報復出来るウツツツ！！！」

「ダメだ！コレ解決できるの今この場にいねえぞ！」

「消防で手一杯だ！状況どうなってる！消防車は!?!」

「あの子には悪いが、もう少し耐えてもらおう！」

「クツソオ!!!」

(ヤツを吹き飛ばせるようなパワーがあればっ！)

—— 「それ相応に現実を見るのも大事だよ」 ——

「ハア・・・ッ」

(泣くなっ、分かってたろ、現実さっ)

——「アナタはヒーローになれますわ」——

あのとき、夢の中の女性が言った言葉は確かに彼の心を支えていた。

しかし、そんな一言に比べれば、オールマイト^彼の言葉は心に遥かに深く突き刺さった。

(やっぱり、ダメなんだ・・・)

ドガアアアアアアアアアアアアア

「ん・・・？」

(ここ、さつき爆発したところ・・・?)

(野次馬精神で来ちやったけど、やっぱり戻ろうかな・・・?)

「・・・えっ!!!」

(アイツなんで?!? オールマイトが捕獲したんじやっ)

「中学生が捕まってるんだとよー」

「もうずっとあのままさ」

(っ、捕まってるって・・・)

「っかあのヴィラン、さつきオールマイトが追ってたヤツじやね?」

「え! オールマイト!？」

「さつきまできてたらしいよ」

「マジで!? ヤツヴェ!」

「じゃオールマイトなにしてるんだ?」

ザワ・・・ザワ・・・

ザワ・・・ザワ・・・

私の落ち度のせいであつ……!

(つ……情けないっ……)

僕があのと看しがみ付かなかつたら……。

(ごめんっ、ごめんなさいっ、)

(情けないっ……!)

(ごめんなさいっ……!)

「ぐうっぐうううううううう」

(かっちゃん!?!?)

——たすけてっ——

(ツ!!!!!!!)

「ハハッ!ツ、!」

(少年!?!?)

「バカヤロオオオオオオオ!!戻れエエエエエエエ!!!」

「!あのガキイ!」

「……いず、く」

(クソオツ!クソオツ!!そんな目で見られたらツ!)

「助けないわけないだろオオオオオオオオオオオ!!!かっつっ

ちやああああああああんツ!!!」

(でもどうする!?!?こつうときはっ!こつうときはっ!ツ25ペー

ジのツ!!!)

「セエイッ!」

投げられたカバンからは筆記用具が飛び出してきた。

シンリンカムイの『先制束縛ウルシ鎖牢』、速攻で相手を自身の腕で縛り上げる。いわゆる初見殺しの技。

彼は今できる最大限の初見殺しを、カバンを投げることで行った。
「クツ、ツグ!?グアア!!」

飛び出した筆記用具の一つがヘッドロヴィランの目にあたり、一瞬のスキが出来た。

「ぷはあっ!!!ハアツ!ハアツ!」

「かつちやあん!!!」

「なんでっ、出久があっ!!」

「分からないよツ!!でもっ、でもっ!!!」

「かつちやんがっ、助けを求める顔をしてたからツ!!!」

!!
!!!
!!!
!!!
!!!
!!!
!!!

少年はツ、無個性^{無カ}なのにツ、たったそれだけでヴィランに立ち向かったのかツ!!!

彼はツ!『ヒーロー』と言う職に就きたいからではなくツ!人を助けたいからヒーローになりたかったのかツ!!!

「情けないッ・・・!」

ググッ、ググググググググググググググググ

「情けないツツ!!!」

「もう少しなんだからア・・・ジャマスルナア

アアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「無駄死にだツ!!!自殺しに来るなあツ!!!」

「いづくにいい、手エ、だすなあツ・・・!」

ゴオオオ
ン
バ

オールマイトの活躍で、ヘドロ事件は無事、解決した。

その後僕は、現場に来ていたヒーローに叱られていた。でも仕方ない、あのときの行動はあまりにも無茶だった。それが分からないほどバカじゃないつもりだ。

かつちゃんはと言うと・・・

「卒業したら是非ウチの事務所に！君は優秀なサイドキックになれるよ！」

称賛されていた。

「・・・。」

ヒーロー達からのお説教が終わった僕は、少し重たい足取りで帰路についていた。

「はあ・・・。」

(オールマイトに謝りたかったけど、取材続いてたし・・・帰ったら、
HPからメッセージしてみよう)

「出久ッ！」

「?・・・かつちゃん？」

「ハアツ、ハアツ。なんであるとき飛び出してきやがった!!ちったあ物事考えれねえのか!!」

「うええ!?そ、それは・・・。」

(体が勝手に動いたんだよお！)

「確かにオメエは頑張ってたけどよお!!通用するかしないかは別だろオが!!!いいか!今後あんな無茶は二度とすんじやねえ!死にましたなんてふざけたことぬかしたらもつかいブツ殺してやらあ!!分かったか!!!」

「わ、分かったから！落ち着いて！」

「気を付けるクソがツ!!!」

「は、はいいいいい!!」

「チイツ！じゃあなクソデク!!!」

「あ、う、うん！じゃあね!!」

(タフネスだなあ。まあ、かつちゃんの言う通りだ、あのときの行動は褒められたものじゃないし、通用しなかったのも僕が無個性むりよくだったから。でも良かったかな。これできちんと身の丈に・・・)

「——本当に諦めてもよろしいの？」

(・・・!?)

「なっ、えっ、あ、アナタは・・・!」

長く緩いウェーブのかかった綺麗な金髪。フリルの沢山ついた白いドレス。その上に来ている紫のチャイナドレスみたいな服。

「あらら？そういえば名前はまだ教えていませんでしたわね。ワタクシ、八雲紫やくもむかりと申しますわ」

「お久しぶりですわね、緑谷出久君」

これが彼女、八雲紫との2度目の遭遇だった。

「と言うより！折角あちからのとき個性を与えて差し上げたのに！どうして

「使わないの！」

「ええええええええええええええええええええええ!!!あのとき僕貰ってたんです
かああああああああああああああああああああああああああ!!!」

「もう・ゆかりんちよつとしよげちやつたんだから！」

「ご、ごめんなさいっ!!」

どうやら僕は、無個性じゃなかったようだ。

緑谷出久：アナザーオリジン（#4）

「——コホン。それで、アナタはヒーローを諦めるのかしら？」
「それは……」

僕は無個性じゃなかった。八雲さんにそう言われたときは少し嬉しかった。無個性むりよくじゃないんだって思えた。

けれども僕は、昔もあのときも無力ではあった。そう思うとやはり言えない。言いたくない。

——言える資格はない——

「……はあ、アナタは深く考えすぎです「私が来たあッ!!」わ……？」

「オ、オールマイト!？」

「H A H A H A H A !!! 少年に礼と訂正、そして提案をするためにマスコミを抜けてきてしまった!!! H A H A H A H A H A !!!」

「ちよつとー。ワタシをのけ者にしないでくださいますー?」

「おおつと、すまないね!……おや、誰かと思えば八雲さんじゃないか!!! なつかしいなあ H A H A H A H A !!!」

「八雲少女」

「H A H A H A ……あ。」

「八雲少女と呼んでくださいます?」

「す、すまなかつたね。八雲少女」

「よろしい♪」

い、いきなりオールマイトが現れたと思ったら、八雲さんと談笑している……

「あの……」

「ん、どうされましたの?」

「お二人って……お知り合いなんですか?」

「そうさ少年! 八雲少女とは5年前に知り合ってたね、傷の手当てをしてもらったのさ!!!」

「そ、そうだったんですか……ところでオールマイト、さっき言ってたことって何だったんですか？」

「おっとそうだった！まず……ん……ん……ッ、礼から言おう」

オールマイトの纏う雰囲気が変わった。

オールマイトだけじゃない。僕の隣にいる八雲さんの雰囲気も、同時に変わっていた。

「君がいなければ、君の身の上を聞いていなければ私は口先だけのニセ筋になるところだった。ありがとう」

「そんな！そもそも僕が悪かフガツ」

「人の話は最後まで聞きなさいな、出久君」

「すまないね八雲少女。あのとき飛び出したのが無個性で小心者の君だったからこそ、私は衝き動かされた。トツプヒーローは学生時から逸話を残している。そして、皆一様にこう言うんだ。」

「——考えるより先に、身体が動いていた——」

「——ッ！」

「君も、そうだったんだろ？」

「……アナタは昔から、透き通るように純粹に憧れていましたわね。

オールマイト 彼が人々を救う姿に。そしてその為の努力を怠らなかつた。」

僕は唯、涙を呑んで二人の声を聴いていた。

「訂正させてくれ」

「もう一度、言わせてくださいいな」

ダメだ、これ以上言われたら。

「君は」

「アナタは」

ボクハ、

「ヒーローになれる」

「よし！では少年、私の個性、受け継いでくれないかい？」
「……え？」

僕の人生は、どうやら波乱万丈になりそうだ。

僕の人生を大きく変えたあの日から、すでに数ヶ月経過していた。
僕を鍛えて下さった師匠2人とうち1人の従者に一言礼を言い、足
早にある場所へ向かっていた。

それは近所の公園、どこへ行くこうにも、いつもココが彼との待ち合
わせの場になっている。

「オイ出久！遅っせえんだよクソが！」

「ごめんかつちゃん！ちよつと個性の訓練してたら遅れちゃった！」

「ったく……それで、カタチにはなったのかよ」

「うん、なんとかね。」

「そオカ、んじやあ今度タイムンだ！次もオレが勝つ！」

「望むところだよかつちゃん！今度こそは僕が勝つ！」

「その為にもまずは雄英に受かんねえと始まらねエ！ゼツテエ落ちん
なよクソが！」

「うん！」

そして僕らはヒーローになる為に、雄英高校の入試試験に挑む。

入試試験って大体ノーベンで行かない？作者だけ？
(#5)

「ついに……来たね、かつちゃん」

「ああ……来たな……」

僕たちは今、雄英高校受験会場に来ている。

憧れた超カッコイイヒーローになる為にそして、師匠達の期待に
えるために、何が何でも合格しなきゃいけない。

いや、合格するんだ。

「……頑張ろうね」

「つたりめーだバカ」

それにしてもいろんな人がいるなあ……猫耳と尻尾の生えた女の
子だったり、ヴァンパイアっぽい女の子だったり、鴉の羽が生えた女
の子だったり……異形型って女の子が多いのかな……？

そんな事を考えていたら、近くを歩いていた女の子がコケようとし
ていた。

「危ないッ！」

「わっ、ひゃあ！」

間一髪のところを抱えることが出来た。よかったよかった。

「大丈夫？ケガとか無い？」

「あ、う、うん。大丈夫……ッ！／＼／＼」

急に顔が赤くなっただけ……どうしたんだろ？

……あつ。

抱きかかえたままだったのを忘れてた！わっ！意識すると恥ずか
しッ！

「ご、ごめんっ！」

「いや、その……あ、ありがと……」

「ぼ、僕は緑谷出久。キミは？」

「ウ、ウチは耳郎。耳郎響香」

「耳郎さんだね。入試、お互いに頑張ろうね！じゃ！」
「え、あ、う、うん」

「おいデク！早よしろや！」
「ゴメンかつちやん！」

(あんな顔で言われたら、ド、ドキドキしちゃったじゃん……。緑谷、出久か……)

少女の心に、なにかしらの感情の灯が燈った瞬間だった。

筆記試験は何事もなく終わり、僕はかつちやんと一緒に実技試験説明会場にやって来た。

実技試験の説明はプロヒーローの【ボイスヒーロープレゼント・マイク】がしてくれる様だ。

『今日は俺のライブへようこそ!!エヴィバデイセイヘイ?!』

「ヨーコソー!!!:あ」

「うるせえバカ」

しまった！思わず返事しちゃった！恥ずかしいっ！

……さつきもう一人返事してたような……あ、耳郎さんのイヤホンジャックが真っ赤だ。

『サンキューお二人さん!!それじゃパパッと実技試験の説明をしていくぜ!!ア－ユーレデイ?!』

シーン……

『コイツはシヴィー!!どうしたお二人さん!!ノッていこーぜ!!』

いや流石に二回目は恥ずかしいよ！

『入試要項通りリスナーにはこの後10分間の【模擬市街地演習】を

行ってもらおうぜ!!持ち込みは自由!!プレゼン後には受験票に記入された演習会場に向かつてくれよな!!』

その説明を受けてかっちゃんは

「出久と殺り合うのは無理か…」

と恐ろしいことを言っていた。タイマンはいいけど殺り合いは怖いよかっちゃん……

『演習場には仮想ヴィランを三種多数配置しているぜ!!それぞれの攻略難易度に応じてポイントを設けてある!!各々の個性で仮想ヴィランを行動不能にし、ポイントを稼ぐのが君達リスナーの目的だ!!勿論他人への攻撃等アンチヒーローな行為はご法度だぜ!!』

「質問よろしいでしょうか!」

プレゼント・マイクが説明している途中区切るように、メガネの青年が立ち上がった。

「プリントには四種のヴィランが記載されています!これが謝りであれば日本最高峰校の恥ずべき事態です!我々受験者は規範となるヒーローの御指導を求めてこの場に座しているのです!」

あんなにハッキリと大勢の前で自分の意見を言えるなんてすごいなあ。

「ついでにその緑髪为天パ少年とイヤホン少女!気持ちは分からないくもないが今は試験中だ!もつと気を引き締めたまえ!」

「うえっ、ス、スイマセン……」

「ゴ、ゴメン」

『そーいう話は後にしな!今は試験中だぜ!』

「失礼致しました!」

『まあそれはともかく!受験番号7111君ナイスなお便りサンキューな!!四種目の仮想ヴィランは0P!各会場にポイント一体所狭しと暴れようとするいわばお邪魔虫なギミックよ!!戦ってもいいけど逃げることをオススメするぜ!!』

「ありがとうございます!」

そう言つてメガネの青年は着席した。試験前にやつちやつたなあ

……

『俺からは以上だ!!最後にリスナーへ我が校の校訓をプレゼントしよう!!かの英雄ナポレオンは言った!【真の英雄とは、人生の不幸を乗り越えてゆく者】と!!更に向こうへ!〈Plus Ultra〉!』
プレゼント・マイクによる説明が終わり、試験会場へ移動する一同。
その中で出久は、

(今日までみっちり鍛えてきたんだ!オールマイトの個性も、紫さんの個性もそこそこ使える。大丈夫。落ち着け僕……)

緊張をほぐそうとしていた。

そして試験会場に着き周りを見ると、耳郎さんがこつちに歩いてきた。

「緑谷、同じ会場だったんだね!」

「あ、耳郎さん、うん、そうみたいだね。」

「ウチらライバルになるけどさ、お互い頑張ろ!」

「うん!」

『ハイ、スタート!!』

耳郎さんと話していたら、急にプレゼント・マイクが試験開始の合図を出した。

『どうしたリスナー!!もう試験は始まってるぜ!!実際には合図なんてないぞ!!』

試験が開始した。そうなる僕がとる行動は一つ、紫さんの力境界で敵前までショートカットだ。

「耳郎さんつかまって!」

「へっ!?きゃあ!」

ついでなので耳郎さんを抱えていこう。

「……!!来タナヒーロー!」

「ムツ殺ス!」

スキマの先には1P仮想ヴィランが二体いた。僕と耳郎さんで倒せば丁度いいな。

「耳郎さん、一体任せてもいい?」

「だっ、だいじよぶ!任しえて!」

本当に大丈夫かな…？顔真つ赤だし……

「無理はしないでね」

「う、うん……／＼／＼」

さて、それよりも、この仮想ヴィランどうやって倒そうか……
やっぱりアレでいいかな？単純そうだし。

「死ニサラセヤア！」

そう言うのと仮想ヴィランは右のストレートを繰り出してきた。

「……ハアッ！」

掛け声で気合を入れ、仮想ヴィランの拳の軌道上にスキマを展開する。気合を入れるのは癖だ。

そして出口となるスキマを、顔の目の前に展開する。すると……
ゴシヤア

自分で自分を殴る形になる。こうするとカウンターと同じ原理になるので、大きなダメージを与えやすい。紫さんに初歩中の初歩として教えてもらった使い方だ。

あっけなく終わったので耳郎さんの手助けをしようと振り返ると、すでに終わっていたようだ。

「緑谷の個性すごいね！空間操作系の個性なの？」

「う、うん、大体そんな感じかな……」

今はあまり出来ないけど、紫さんは慣れたらいろいろ出来ると言っていた。僕自身この個性はよく分かっていない。

「それより……ここからは離れて行動しよう。その方が効率いいと思うし」

「ウチもそう思う。じゃあ、お互い頑張ろ！」

「うん！」

耳郎さんと別れた後は、着々と倒していった。時々ケガをしている人がいたので、その人達はスキマで安全な場所に移動させたりもした。

そして終了3分前……

ズドドドドドドドドドドドドドドドド……

「な、なんだあれ！」

「でかすぎだろ！」

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ビルに紛れていたOPヴィランが起動し、市街地を破壊していく。

圧倒的脅威。

それを目の前にした者は逃走する。勝てないから逃げる。なんだかんだ自分の身が一番可愛いからだ。

しかし、逃げない者もいる。それは、

「いたっ、ちよ、抜けないッ……」

「耳郎さん!!」

「緑谷!?なんで！」

「僕がピンチでも、人のピンチを助けずしてヒーローを名乗るのは嫌だから！」

「ッ／／／!?」

(ヤバッ……か、かつこいい……)

自己犠牲の精神を持つ者

「瓦礫はどかしたから！スキマに入って！」

「ごめんっ……あ、ありがとっ」

「耳郎さんは助けた！次はヴィランを倒す番！」

オールマイトから受け継いだ個性で全身に力を巡らせて、ヴィランの顔前まで一気に跳躍する。そして腕に力を収束させて大きく振りかぶる。

——ケツの穴ぎゅつと引き締めて、心の中でこう叫べ!!!——

(オールマイト師匠、全力でいきますッ!!)

そして一気に拳を突き出す。

「SMASH!!!」

その拳を受けたヴィランは、大破された頭部パーツを撒き散らしながら倒れていった。

「なっ!!」

「ウソオ!!」

「ウソダドンドコドーン!!!」

『試験終了ー！ー！ー！ー!!』

終了を告げるプレゼント・マイクの声で、雄英高校入試試験の全過程が終了した。

「よおやつと終わったなあ、かつたりい……」

「お疲れさま、かつちゃん」

僕はいつも通りかつちゃんと帰路についていた。

(師匠達に良い結果を伝えられるといいなあ……)

そんな事を考えていると、後ろから呼び止める声が聞こえた。

「緑谷っ！」

「じ、耳郎さん?どうしたの?」

「ハアツ、ハアツ、あ、あるとき、助けてくれてっ、ありがとう」

「そ、そんな!気にしなくてもいいよ!人助けとお節介はヒーローの本懐だから!」

「それでもっ、ありがとう!」

そう言う耳郎さんの笑顔は、とても可愛らしかった。

「またヒーロー科の教室で会おうねっ、それじゃあね!」

そう言って走っていく耳郎さんを、かつちゃんはとても悪いニヤけ顔で見ている。

「おいおい出久ウ、入学早々彼女作ってんのかよ!?!」

「そんなんじゃないよ!と言うよりまだ入学してないし!」

「ハア?テメエバカか?俺も出久も受かってねえ訳ねえだろおがよ」

「か、かつちゃん……」

かつちゃんはこういう所がすごいなあ。自信満々と言うか、大胆不

敵と言うか、やっぱり憧れてしまう。

受かっていると、いいなあ……

「おっしや！帰ったらタイマンすんぞ！」

「ええええ！今日くらい休もうよ！」

戦闘狂な所は嫌いかな。

作者の高校初日はお通夜でした。(# 6)

入試試験から一週間たった今日、雄英高校から合格通知が来た。
た。

そして、

「出久くーん、開けないのー？お姉さんがあけちゃうよー？」

紫さんも来ていた。

「いやいやいやいや！なにサラツといるんですか！」

「えー？ダメなのー？ゆかりん悲しいわあ……」

「え、いや、あの、ごめんなさい……」

「ウソよ。それより早く開けましょ」

「あ、はい」

くそう！コツチは緊張と不安で堪らないのに！

そう思いながら、紫さんに促され合格通知の入った手紙を丁寧に開けていく。中には円盤型の機械が入っていた。

「なんででしょうかコレ」

「投影機じゃないかしら？いまどきの合格通知はハイカラなのね」

投影機の起動ボタンを押して机に置く。そしてディスプレイが映されると、

『私が投影されたツ!!』

「オールマイト!?……あれ、雄英からだよな？」

『実は私がこの町に来たのは、今年から雄英の教師を務めるからだったのさ!!』

「そうだったの!？」

『さて、少し早い結果発表といこうか。まずは筆記試験、多少間違いがあつただけで全ての科目が90点以上だった。素晴らしいとしか言いようがないね。そして実技試験、個性を最大限活用して仮想ヴィランを倒し47ポイント。君にしては低いような気がしなくもないが、問題なく合格だ。』

しかし!!!実技試験において見ていたのはヴィランポイントだけじゃない、レスキューポイントという評価点もあつたのさ!!!君は出

会った全てのケガ人を安全な場所まで運んでいた。さらに、OPPヴィランも倒した!!!よって君のレスキューポイントは77ポイント!!!合計124ポイントで、文句無し的一位通過だ!!!来いよ、緑谷少年。ココが君のヒーローアカデミアだ!!!』

「ッ、はいっ!」

よかった、受かってた!と言うより僕が一位通過なんて!

「よかったわね。出久君」

「はい!.....あの、紫さん」

「なーに?」

「あのとき、ヒーローになれるって言うてくださって、本当にありがとうございました。紫さんと出会っていなければ、僕は今頃別の高校を受験していたかもしれませぬ」

「:ハア。気にしなくても結構ですわ。ですが、あのときワタクシはそう言っただけ。実際諦めず努力を続けてきたのは出久君自身ですわ」

「それでも、僕はその言葉に救われたんです。ありがとうございますわ」

そう言っ僕は頭を90度下げる。

紫さんもそうだけど、オールマイイトもそうだ。一回目は悲しかったけど、その後と言ってもらえて、個性まで受け継がせてもらって.....僕は本当に恵まれている。

だから感謝しなきゃ。この出会いに。

ああ、愛おしい。堪らなく、アナタが愛おしい。

もう、いつそのこと、

ワタクシのモノにしてしまおうか。

あれからとくに何事もなく中学生生活を終えた僕らは今日、初めて雄英に登校する。

「出久、忘れ物はない？ハンカチは？ティッシュは？」

「大丈夫、全部持つてるよ。もうかつちゃんに来てるから行くね！」

いってきます。と言おうとした、お母さんが僕を呼んで

「出久！……超カッコイイよ！」

「……うん！行つてきます！」

震えた声でそう言い、元氣よく玄関を飛び出した。

「おせエぞデク！」

「ごめんよかつちゃん！」

「でけエ……」

「でかつ！」

僕達が一年間お世話になる1-Aの扉の前まで来て、第一声がそれだった。

それにしても大きいな。バリアフリーってヤツなのかな？まあギャングオルカくらい大きな人も多いだろうしこれぐらいないとダメなんだろう。

そう自分の中で結論付け、教室に入っていく。

「へえ〜ロックが好きなんだ。どんなのが好きなん？今度お茶しない？」

「ごめん、ウチアンタみたいなウエイイはちよつと……」

「ちよ心外なんだけど！」

耳郎さんと金髪の男子が話していた。流石ヒーロー志望、コミュニケーション能力が高い！

「おはよう耳郎さん」

「！お、おはよう！同じクラスだったんだ！」

「うん。これからよろしくね！」

「こつちこそ、ヨロシク！」

耳郎さんが同じクラスでよかった。知り合いが一人だけなんて寂しいもんね。

「オイオイ、空気にしないでくれよ！オレ上鳴電気ってんだ、ヨロシク！」

「僕は緑谷出久。よろしくね、上鳴くん」

ものの数分で友達が一人出来ちゃった！流石ヒーロー志望、コミュニケーション能力が高い！

登校初日つてもっとこうお通夜みたいな雰囲気になるものだとばかり思っていた僕は、これから送るであろうヒーローアカデミアが楽しみで仕方なかった。

「お友達こつちがしたいなら余所へ行け……」

……なんか足元で声が聞こえた気がしたんだけど……

恐る恐る振り返るとそこには……

「ココはヒーロー科だぞ……」

な、なんかいる——!?

個性把握テストで大暴れ（嘘）（#7）

「ハイ、静かになるまでに8秒かかりました。時間は有限だ、君達は合理性に欠けるね。」

その男性は、教室に入るやいなや先生みたいにお小言を言い出した。

（（（いや、だれ？））））

そう思ったのは僕だけじゃないハズ、実際皆そう言いたげな顔してるし。

「担任の相澤消太だ、よろしく」

その男性もとい相澤先生は、自己紹介と言うには少し短い自己紹介をした。

相澤消太：どこかで聞いたことあるような。それよりも、

（（担任だったんだ……））

「さて、早速だが全員コレ来てグラウンド出る。」

そう言う相澤先生の手には体操服が握られていた。それを着てグラウンドに集合すると、相澤先生はとんでもない事を言い出した。

「全員そろったな。それじゃこれから個性把握テストを行う」

「『個性把握テスト!』」

「入学式は!?! ガイダンスは!?!」

「ヒーロー目指してるんなら、そんなもん時間の無駄だ。雄英は自由な校風が売りだ、それは先生にも適用される。覚えておけ」

な、なんとという横暴! 確かにヒーローになるには一筋縄にはいかなけれど、入学式くらい出席させてくれたっていいじゃないか!

しかし、そんな願いは勿論届かず、相澤先生は説明を続ける。

「中学からやってきた個性使用禁止体力テストを個性を使って行う。そうだな……入試試験一位通過の緑谷」

「……ッ! ハ、ハイ!」

しまった! まさか振られるとは思ってなかったから反応おくれちゃった!

「中学のとき、ハンドボール投げ何メートルだった?」

「えっと、確か、51メートルだったと思います」

「じゃあ個性使ってやってみろ」

「ハイ！」

「せえ、のっ！SMASH!!!」

投げられたボールは空高く飛んでいき、ギリギリ見える位の所で落下した。

相澤先生が提示したタブレットには、705.3と表示されていた。

「「スゲエエエエ!!!」」

「705メートルってマジか……」

「ナニコレ面白そう！」

「個性思いつきり使えんだ！流石雄英！」

「面白そう、か……ヒーローになる為の三年間、そんな腹積りでのかい。それじゃあ八種目総合成績最下位の者は『見込み無』として除籍処分しよう」

……は？

「「ハア——?!?!」」

嘘だろ……？でも、相澤先生あの眼は、ふざけながらも真剣に話す紫さんの眼によく似てる。

……本気でやらなきゃヤバそうだ。

「生徒の如何は俺達の『自由』。ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ！」

「でも！入学初日ですよ?!初日じゃなくても理不尽すぎる！」

「自然災害、大事故、はたまたウイルスによる身勝手の極意。いつどこから来るか分からない厄災、それを覆していくのがヒーローだ。放課後マックで談笑したかったなら御生憎。雄英は君達に試練を与え続ける。更に向こうへ、Plus Ultraさ。全力で乗り越えてこい」

そう言い残して相澤先生はテストの準備に取り掛かった。

相澤先生……素直じゃないんだな。

そう出久は思った。

確かに除籍にはさせるつもりなのだろうが、しかしそれ以上に、『俺の期待を超えてくれ』という意思が汲み取れたからだ。

いけないいけない。紫さんのせいで人が考えていることが何となく分かるようになってしまった。メンタリストなんて目指してないぞ。

……まあ、頑張ろうか！

—50メートル走—

スキマでテレポートし1秒42。相澤先生からOKはもらっているので合法だ。

「OPヴィランを倒したパワーといい、あのワープゲートといい、緑谷君の個性はなんなんだ？」

3秒04を記録した『個性：エンジン』を持つ飯田君は僕の個性に疑問をいただいているようだ。

—握力—

ワン・フォー・オール・フルカウルを発動して513kgだった。

「あの細身で俺と同等とは、もつと鍛えるべきか」

『個性：複製腕』を持つ障子君はそう呟いていたそう。

—立ち幅跳び—

これまたワン・フォー・オール・フルカウルを発動して68メートルだった。スキマは距離に加算されなさそうだったので使わなかった。

「オレも負けてらんねえなあ！」

対抗心が燃え滾るかっちゃんであった。

—反復横飛び—

またまたワン・フォー・オール・フルカウルを発動して147回。最後の方は吐きそうになって遅くなってしまうた。

峰田君の『個性：もぎもぎ』から、両サイドにスキマを開いて高速移動も考えたけど、反復では無くなってしまうのでやらなかった。

—ボール投げ—

デモンストレーションのときと同じなので割愛するよ。

ボール投げ一位は∞を叩き出した『個性・無重力』の麗日さんだった。∞つてあるんだ……。

―上体起こし―

いつものワン・フォー・オール・フルカウルを発動して69回。

「緑谷スゲエな！個性使わなきゃ耐えらんなかったぜ！」

切島君の『個性・硬化』でようやく耐えられたらしい。申し訳なかったので謝ったら、

「気にすんなよ、全力出してこそその男だろ！」

男気溢れる性格らしい。

―長座体前屈―

こればかりは個性の使いようがないので普通に行い、58センチだった。

(（普通だ、スゴい）)

今までが今までだった為に逆にスゴがられたりした。

いや、コレ普通だからねみんな！

―持久走―

お馴染みのワン・フォー・オール・フルカウルを発動して56秒だった。持久走なんだからスキマは卑怯だと思って使わなかったら、

「何故もう一つの方の個性使わなかったんだ緑谷。まさか卑怯だと思っただのか？だとしたら甘いよ」

相澤先生に怒られてしまった。

ようやくテストが終わって結果発表の時間だ。流石に最下位は無いけど、やっぱりこういうのは緊張するな……。

「じゃあパッと結果発表。トータルは単純に各種目の点数を合計した数だ、口頭は面倒なんで一括開示する」

そう言い相澤先生はモニターを開示した。

あ、僕一位だ。二位は八百万さんか、握力測定で万力出してた人だよ。そして最下位は……峰田君か。

峰田君がいるであろう方に顔を向けると、

「」

白目のムンクの叫びがいた。まああんなこと言われたら僕だって
そうなるだろう。さらば峰田君っ！

「あ、ちなみに除籍は嘘な」

……は？

「二ハア——?!?!?」

え？…しないの？あのとときの眼マジだったじゃん！

「君らの本気を引き出すための合理的虚偽だ」

「あんなの嘘に決まってるじゃない、ちよつと考えれば分かりますわ」

いやいや八百万さん。この人マジでやろうとしてたから。

……まあ逆に言えば、相澤先生のお眼鏡にかなったっていうこと
か。なら、まあ、よかったのかな？

「ちよつとヒヤツとしたな」

「俺はいつでも受けて立つぜ」

「これにてテストは終了。教室にカリキュラムとかの資料あるから目
を通しておけよ。じゃ、解散」

はあ、結局テストだけで初日が終わってしまった。折角自己紹介考
えてきたのにパーになっちゃったよ。

そんな事を考えていると、不意に肩をつつかれた。

「あれ、耳郎さん？」

「ウ、ウチさ、近くにアパート借りてるんだけど、近くまで、えと、そ
の……い、一緒に帰らない？」

「もちろん！ちなみに何処にあるの？」

「ええつと、くくくっていうところなんだけど」

「あ、そこ丁度通るところだよ。よかったら家まで送るよ？」

「うえ!? イ、イイよそこまでしてくれなくも!？」

「でも、女の子一人だと危ないよ？」

「いや、でも、あうう／／／」

人助けはヒーローの本懐だからね！（無頓着）

「ダメかな…？耳郎さんが心配なんだ」

「ツ！／／／じゃ、じゃあ、オネガイシマス…／／／」

「うん！じゃあ帰ろっか！」

そんな事があって、僕は耳郎さんと帰る事となった。

二人の近くの木陰にて

「帰り道が同じようだったから誘おうとおもったんだが……」

「ジヤマしちや悪いよね〜」

「女誑おんなたらししは健在だなデク！」

「男らしいぜ緑谷！」

「ケロ、熱々ね耳郎ちゃん」

「抜け駆けしやがってエエエエエエ」

「あれが俗に言う恋愛…羨ましいですわ」

様子を覗うーAのメンツがいたそうなの。

戦闘訓練説明編（#8）

ドタバタの入学初日が終わり翌日、僕は耳郎さんと登校していた。
「ヒーロー基礎学楽しみだね」

「そうだね、でも何するんだろうね。やっぱり戦闘訓練かな？」

「それもあるだろうけど、やっぱり救助訓練もするんじゃないかな。
憧れの人が言ってたんだ。『ヒーローの本懐は人助け』だって」

「へえ……そっか、凄いヒーローだね。その人」

「うん！」

昨日の帰り道、どうせならと提案してみたら少し考えた後了承してくれた。かつちゃんも誘ったんだけど

『うつせー死ねデク』

と言われてしまった。何がいけなかったのだろうか。

……と、そんな事を考えているうちに着いたようだ。

ああ、楽しみだな、ヒーロー基礎学！

普通科目の午前が終わりいよいよヒーロー基礎学の時間がやってきた。担当は勿論

「わーたーしーがー…」

我らがヒーロー！

「普通にドアから来たツ!!!」

「ニ「オールマイト！」」

「すげえホンモノだ！」

「あれシルバーエイジのコスチュームじゃん！」

「画風違い過ぎて鳥肌が…」

世界が認めるNO.1ヒーローの登場に皆興奮しているようだ。
彼に憧れヒーローを志す者が大半なのでその反応は当たり前とも言える。

「早速始めようか『ヒーロー基礎学』！ヒーローの素地を作る為の様々な訓練を行う課目だ！」

単位数も多いぞ！とマツスルポーズで言うオールマイトを、皆真剣な瞳で見つめている。

「そして今日はコレ！戦闘訓練!!」

「戦闘…！」

「訓練…！」

余程燃えているのか、獲物を狩るタカのような眼でかつちゃんが僕を見ている。

止めて！そんな眼で見ないで！怖いよ！

「そしてそいつに伴って…：…こちら!!」

そう言っただけでオールマイトが指差した壁が動き出した。

「入学前に送って貰った『個性届』と『要望』に沿ってあつらえたコスチュームだ!!」

「…おお!!」

そこに収納されていたのはコスチュームの入ったアタッシューケースだった。

「着替え次第グラウンドβに集まるように!!」

「…はい!!」

そう言うや否や、オールマイトとクラスメイト達は自分の番号が書かれたアタッシューケースを抱えて駆け出して行った。

待ちに待ったヒーロー基礎学に自分だけのコスチュームで心が躍っているようだ。かつちゃんも例外ではない…：…が、轟君だけは違うようだ。

…：…まあ、僕も早く行こうか！

「…始めようか！有精卵共!!」

コスチュームを着るのに戸惑っていたら、すでに始まっているよう

だった。

「…あ、み、緑谷！イイじゃん！アートロックってカンジで」

「耳郎さん！その、アートロックはよく分かんないけど、取りあえずありがとう！耳郎さんも似合ってるよ」

「ほ、ほんとう？ありがとね」

彼女らしい例え方をした耳郎さんは、それこそザ・ロックって言うコスチュームだった。

ライトコーラルのシャツの上に黒い短めのジャケットを羽織っており、ズボンにはジャケットと同じく黒のジーンズだ。そして彼女の特徴的な三白眼の少し下には赤い涙マークがペイントされている。

「質問よろしいでしょうか！此処は入試のときの演習場ですが、また市街地演習を行うのでしょうか!？」

そう質問したのは、白い全身鎧のようなコスチュームを纏った飯田君だった。かなりサマになっていてカッコいい…！

「いいや！もう二歩先に踏み込むぞ！屋内での対人戦闘訓練さ！ヴィラン退治は主に屋外で見られるが、統計でいえば屋内のほうが凶悪ヴィラン出現率が高いんだ」

「無鉄砲に飛び出さず屋内で機会を見計らう、ということですか?」
「そう言う事さ緑谷少年！真に賢いヴィランは屋内に潜むのさ!!!」

僕の疑問にオールマイトは肯定した。何故そんな事を言ったのかというと、藍さんから、紫さんは個性^{スキマ}を使って情報操作を行い、間接的に『異変』というものを起こす、という話を聞いたことがあるからだ。

必要なことらしいけど…：…ヴィランじみてるよなあ…：…。

「よって、君らには『ヴィランチーム』と『ヒーローチーム』に分かれ2VS2の屋内戦を行ってもらおう!!」

「基礎訓練もなしに?」

と蛙吹さんがツッコむが、

「その基礎を知る為の実践さ！ただし今度はぶっ壊せばOKなロボじゃないのがミソだぞ!!!」

そう切り返すオールマイトであった。考えるのがニガテなはずな

のに、中々どうして考えられている。
紫さんの入れ知恵かな？

「勝敗のシステムはどうなりますの？」

「ブツ飛ばしていいんすか」

「また相澤先生みたいに除籍とかつて……」

「どのような分かれ方をすればよろしいのですよか!？」

「このマントヤバくない？」

「んんんんんんんんんんんん!!!」

次から次へと繰り返し出される質問に、面倒になったのかオールマイトは懐からメモを取り出し説明を続けた。

取り出した際にメモの隅っこに「B Y ゆかりん」と書いてあったの
は見なかつたことにしよう。

「状況設定はヴィランがアジトに核兵器を隠していて、ヒーローはそれを処理しようとしている！ヒーローは制限時間内にヴィランを捕まえるか核兵器を回収する事で、ヴィランは制限時間まで核兵器を守るかヒーローを捕まえる事で勝利となる！コンビ及び対戦相手はくじだ！」

「適当なのですか!？」

「プロは他事務所のヒーローと急造チームアップをすることが多いからそういう事じゃないかな？」

飯田君らしい質問を持ち前のヒーロー雑学で答える。バカ真面目なんだな、と皆が思った瞬間である。

「そうか……！先を見据えた計らい！失礼致しました！」

「OK！早く始めようか！」

ちなみに僕は耳郎さんと一緒になった。変な縁があるものだね。

「よ、よろしくね、緑谷」

「うん、こちらこそよろしく！」

(緑谷とだ！めっちゃ縁があるけど、これって、もしかして！もしかし

ちやったり!?)

いままで信じていなかった赤い糸を信じ始めた耳郎であった。

訓練と実戦の境界（#9）

「さて最初の対戦は……ヒーローサイドがAチームでヴィランサイドがDチームだ!!!」

「しよっぱななあ。キンチョーするなあ……」

「大丈夫！僕と耳郎さんなら絶対勝てるよ、だから頑張ろ！」

「緑谷……うん、そうだよね！」

「いよいよ始まる戦闘訓練の最初は僕たちが出ることになった。ちなみにAチームだ。」

そして相手は……

「ようやつと個性アリの全力でタイマンはれるなあ出久！」

「緑谷君、耳郎君もよろしく頼む！」

Dチームのかっちゃん和飯田君であった。いきなりかっちゃんのチームと当たるなんて思ってもみなかっただけにビックリである。

「さあ両チームとも持ち場について！着いたら5分後に始めるよ！」

なにはともあれ、紫さんの訓練を活かせるように頑張ろう！

持ち場に着いた僕たちは今、作戦会議をしている。

「じゃあ開幕でウチが索敵して、その後突入？」

「うん、それが一番だと思う」

「分かった、じゃあそれで……でも、緑谷の個性、スキマだっけ？それ使えば速攻じゃない？」

「まあそれはそうなんだけど、それだと複数人での訓練の意味がないと思うんだ、だから今回は使わないようにしようと思ったんだ」

「そうなんだ……み、緑谷のそういうサザンロックなところ、ウチは、好き、かな……」

「本当？ありがとう、サザンロックはよく分かんないけど……」

『5分が経過したぞー！ということで戦闘訓練一回目、スタート!!!』

ビルの壁面に取り付けられたスピーカーから聞こえたオールマイトの声で開始が宣言された。

「耳郎さんお願い！」

「オツケーらせて!」

そしたらすぐに耳郎さんに指示を出して索敵をしてもらおう。

さあ、しまつていこう!

・
・
・

索敵の結果、二人とも元の部屋から動いていないことが分かったの
で窓から侵入したのだが……

「おかしい……」

「なにがおかしいの?」

「あ、いや、あれだけウズウズしてたかつちゃんが動かないなんてヘン
だなつて思つて」

「あー、あのツンツン頭の? たしかにあの人……緑谷伏せて!!」

反射的に頭を下げた僕の頭上で爆発が起こった。

「待たせちまつたなあ、さつさと始めようや!」

「かつちゃん……」

やつぱり、かつちゃんなら来ると思つたよ! 考えろ、今できる最善

案は何だ……

「耳郎さん行つて!」

「ウチだつて戦えるし!」

「かつちゃんの目標は僕だから、耳郎さんは核兵器がある部屋まで行
く方がいいんだ!」

「でも!」

「いいから! お願い!」

「ツ、…分かつた」

これで僕とかつちゃんの1VS1、正直真向勝負で勝てるか分かん
ないけど、やるしかない!

「緑谷……勝つてね、ウチ信じてるから……」

「耳郎さん……うん、絶対勝つ」

チームメイトが信じてくれたんだ、勝てる勝てないじゃない、勝つ

んだ!

「お喋りは終わったかあ? んじゃまあ……死ねえ!!」

そう言うとかつちゃんは、爆速ターボで接近し右の大振りを仕掛けてきた。勿論それは予測していたので、軌道上にスキマを展開し、かつちゃんの右頬に当たるように出口を繋げる。

が、しかし

「そお来んのは分かってんだよ!」

左手で爆発を起こし巧みに回避してしまった。そしてその勢いのまま左のストレートが僕に刺さる。

「ガハアツ!」

「まだまだ終わりじゃねえぞ!」

そのまま流れるように胸ぐらを掴み背負い投げの要領で、さらに爆発の衝撃で投げ飛ばされてしまう。が、壁に叩き付けられる前にスキマを開いて離れたところに着地する。

「やっぱ一筋縄じゃいかねえよなあ……」

「僕は負けるつもりはないぞ、かつちゃん!」

「上等だ! 本気のテメエぶっ殺して俺が上だってこと分からせてやらあー!」

そう啖呵を切り、宿敵^{ライバル}を倒す為互いに走り出し、クロスカウンター
の形で相打ちになる。

その殴り殴られる音により第二ラウンドが始まった。

『残り2分を切ったぞ!!』

タイムリミットを告げるオールマイトの声で互いに距離を離し、どう倒し切るか思考をこらす。

だが、緑谷には秘策があった。しかし、正々堂々とした駆け引きを好む彼の心がそれを使う事を許さなかった。

そんなときに思い出したのは、『信じてる』と言い自分に任せてくれ

たチームメイトの存在だった。

彼女もまたヒーローに憧れ、この訓練に想いを馳せていた事だろう。そう思うと、自分の意地のなんとくだらないことだと思った。

「ごめんよかつちゃん」

「…ああ？」

それでも正々堂々と勝ちたいと思う気持ちはあった。

「これだけは使いたくなかったんだけど…」

「いきなりなんだあ…？」

しかし、それよりも少し、彼女の期待に応えたいという想いの方が強かった。

「決着はまた今度にしよう!! 【夢と現の境界】！」

「ああ？…な、なに…を…」

紫より授かった『境界を操る程度』の力。その真髄である『物事の境界線の操作』の一つを習得した緑谷は、睡眠の境界線を操作し、爆豪を深い眠りにつかせた。

そして彼は、想いを馳せる彼女のもとへと向かうのであった。

なお、勝利したのは当然ヒーローチームであった。

その日の放課後、僕はクラスの皆に囲まれていた。

「爆豪との殴り合い、男らしかったぜ緑谷！」

「初っ端からあんな熱い試合みせられてよお、俺も気合はいっちなまったぜー！」

「スマートじゃなく「あのタイミングでよく避けたよー！」

「緑谷君！君の個性はなんなんだ！」

「ケロ、たしかに気になるわね」

「個性の使い方も素晴らしかったですわ！」

「聖徳太子イ!？」

八方から声かけられるから思わずオールマイトの台詞とつちやつたよ！

と、取りあえず、質問にだけは答えよう。

「えっと、僕の個性は『境界』と『身体能力強化』だよ。後者はそのまんなまで、前者は空間にスキマを開いてワープしたり、今日の訓練でしたように物事の境界線を操ったりできるんだ」

「個性二つも持つてんのか!? パネエな!」

「しかも境界線の操作ってスゴくない!」

「なんでもアリってこと? かあーっ、うちには敵わんなあ」

「俺なんて尻尾があるだけだもんなあ」

「そんな! 皆良い個性じゃないか!」

「いやー緑谷には言われたくねえなあ」

そ、そんな…本当にそう思ってるのに…

「…有象無象の管理者」

「いきなりどうした常闇」

皆ヒーロー志望ってだけあつて積極的だなあ。それに、それぞれの個性っていう共通の話題があるから、すぐに仲良くなれて、楽しいなあ。

と、感慨に浸っていると。

「オイコラクソデクウ!!」

「かっちゃん!」

「なに終わらせてくれてんだあ!? まだ勝負はついてねえだろおが!!」

そう言つて胸ぐらを掴み前後に激しく揺さぶられる。

「こ、今度! また今度おとおお!」

「今度つていつだクソが!」

ギャーギャー

ワイワイ

こうして、とても穏やかな雰囲気です。英雄生活二日目を終えたのであった。

・ ・ ・

—— 「大丈夫！かつちゃんを倒して僕が来た！」 ——

「はあ……」

緑谷カツコよかったなあ…

「どったの耳郎？」

「はえっ！いや?!なにも!?!」

そう思っていたら、近くにいたであろう三奈に声をかけられ、少しキョドってしまった。

「?……!はっはくん、さては緑谷のこと考えてたな〜?」

「なあ!ちがつ、ちがうし!緑谷のことなんて考えてないし!」

「はいはいごちそーさま!」

「だから違うしい!」